

低出生体重児における授乳・離乳期の生活状況や食事の困りごとの特徴～乳幼児栄養調査のデータの再解析～

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD学会事務局 公開日: 2019-08-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 祓川, 摩有, 吉池, 信男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003642

低出生体重児における授乳・離乳期の生活状況や食事の困りごとの特徴 ～乳幼児栄養調査のデータの再解析～

祓川摩有¹、吉池信男²

1. 聖徳大学児童学部児童学科、2. 青森県立保健大学 健康科学部 栄養学科

【背景・目的】

近年、低出生体重児の割合の増加に伴い、低出生体重児の支援の充実が求められているが、平成 27 年度の乳幼児栄養調査（厚生労働省）では、出生体重児別の詳細な分析は行われていない。そこで、低出生体重児への支援の充実のための基礎資料を得るために、本調査データの再解析を行った。

【対象・方法】

厚生労働省に本調査のデータ（2992 世帯、3936 名）の利用申請を行い、承認を得た。このうち、出生体重が 1500g 未満、4000g 以上を除外した 0～2 歳未満の 1107 名を解析対象とした。1500g 以上 2500g 未満を低出生体重児群（86 名、2292±223g）、2500g 以上 4000g 未満を正出生体重児群（1021 名、3081±324g）の 2 群に分け、母乳指導・支援の有無、授乳期の栄養方法、調査時点の母親の就労状況、子の預け先、授乳の困りごと、離乳食の開始時期、離乳食の困りごと等との関連を解析した。

【結果】

低出生体重児群は、正出生体重児群と比べ、在胎週数が少なく（それぞれ平均 37.3、38.9 週）、1 歳時点での肥満度も有意に低かった。低出生体重児群では、母親が就労している者が少なく、保育所に預けている者も少なかった。また、産後に母乳支援を受けている者は少なかったが、0～5 ヶ月の授乳方法に有意な差はみられなかった。困りごとでは、母乳を飲むのを嫌がる、子どもの体重の増えがよくない、離乳食の食べる量が少ないなどの項目を回答している者が、低出生体重児群において多かった。

【結論】

低出生体重児の授乳・離乳期の生活状況や困りごとの特徴が明らかになった。また、低出生体重児は、保育所等に預けていないことが多いため、乳幼児健診や病院での支援をより充実させる必要が示唆された。